エンゲージメント

第 2 章

Kumari

〈第１章　あらすじ〉

　ローザ・ドリーはヒーラーとしてマウイ島に暮らしている。
　身寄りのない彼女は、六三歳の誕生日を迎えて間もなく、自分の体が癌で蝕まれていることを知った 。 余命は半年ほど。
　ローザの父親は日本人であるが、ローザが生まれる前に両親は離れ離れになっており、彼女の母親は四〇代の若さでこの世を去った。また十八年前にローザの元に届いた一通の手紙によって、日本人である父親もすでに他界していることを知った。その手紙には故人の名前である　「佐伯創一郎」の下に、「故人親族より」とだけ書かれていた。

　余命を宣告された日の午後、ローザは浅い眠りの中で、
『最後の仕事を終えたら肉体から離れ、長い休息を取りなさい。近々、後継者をあなたの元に送ろう。残された時間は自分の為に使いなさい。今のうちに逢いたい人に会っておくがよい』
　そのような言葉を聞いた。

　最後の仕事…今のうちに逢いたい人…

　夜明け前の砂浜で彼女は、それらのことを考えていた。
　すると遠くのベンチでうずくまるように座っているブロンズヘアの男の姿が目に映った。そしてまた、この数日、頻繁にローザの夢の中に現れる男性がおり、ローザはその男が誰であるのかわからぬままに、何度か奇妙な夢を見続けているのだった。

第　2　章

あなたの容姿のことで、誰かに傷付けられたとしても、
けして、その人達を憎んではなりません。
もしも心が苦しくなってしまった時は、神様にこのように祈りなさい。

『神様、私のこの顔立ちに、罪は無いのでしたら、
どうか罪であるという人達の考え方を、正してあげて下さい。
私のこの瞳の色に、罪は無いのでしたら、
どうか罪であるという人達の言葉を、正してあげて下さい。
私のこの髪の色に、罪は無いのでしたら、
どうか罪であるという人達の行いを、正してあげて下さい。
そして、もしも、私に罪があるというのでしたら、
どうか私を産んだ母親を、許してあげて下さい』

母へ。

この言葉を覚えておりますか？

あなたが私の髪を何度も何度も撫でながら、教えてくださった祈りの言葉です。

何年経っても忘れたことはありません。

今日、久しぶりにあなたが夢に出て来ました。嬉しそうに微笑んでいましたね。

私もあなたの微笑みに、ひと時の幸せを感じることが出来ました。

ローザはペンを置いた。

書き綴った「覚え書き」のノートをしまおうと静かにデスクの引き出しを開けると、「サエキ　ソウイチロウ　サマ」と、日本語のカタカナの文字で、宛名だけが書かれた封書が目に映った。懐かしい母親の筆跡である。封書の裏側には、テレーザ・ドリーという母親の名前も記されていた。その封書は母親の遺品を整理していた時に出てきたものである。

「お母さん、この、サエキソウイチロウという文字は、あなたが唯一覚えた日本語のカタカナですね」

ローザは色褪せた封書を手に取ると、それをそっと胸に当て、静かに囁いた。

（先程のあなたの幸せに満ちた顔はもうすぐ私があなたの元へ参るからですか？　それとも父がやっとあなたを迎えに来てくださったのでしょうか。それとも…）

ローザは亡き母親の筆跡が残されている封書を胸に当てたまま、鏡の前に立ち、今日の夢の中で微笑んでいた母親の顔を思い浮かべている。鏡に映し出されているダークブラウンの髪、その髪とほぼ同じ色をした瞳、誰もがハーフであると気付く鼻筋の通った東洋的な顔立ち。それらは生前の母親が何よりも愛してくれたローザの容姿であった。

「お母さん、時代は変わりましたね」

昨日、ローザに声を掛けてきた日本人女性達の中の一人が、自分の頬を擦りながら、「私の親のどちらかがせめてアメリカ人だったら、ローザさんのように綺麗な顔立ちで生まれたんだろうねぇ」と、そう言って笑っていた。そのことを亡き母親は嬉しく思ったのかもしれないと思う。ローザは鏡の向こうの自分に向かって静かに微笑んだ。自分に重なるように四十六歳のままで止まっている母親の顔が浮かんできた。

昨日、東洋的な顔立ちのローザに親しみを抱いた五十歳代くらいの日本人女性達は、ローザを囲み、強い日差しを気にすることもなく会話を楽しんでいった。幼少時のことを思い浮かべれば自分の容姿が他人に褒められるなど、あの頃のローザにはとても考えられないものだった。

「人間の記憶ってすごいですね」

六十三年もの長い歳月を過ごしながらも、瞬時に幼少時の記憶が甦る。暗く沈んだ母親の顔を初めて目にした日、その日は、「あなたのお父さんは日本人よ」と、父親の国籍を母親から聞かされた日でもあった。

　それはローザが小学校に入ったばかりの頃だった。その日は朝から強い風が吹きつけていた。 しかし、そこはマウイ島ではなかった。そこがどこであったのか、ローザの気憶もおぼろげである。会う人会う人達の冷たい視線に怯えて暮らしていた記憶しかなく、また当時を振り返れば母親の悲しみに満ちた目が思い浮かぶのだった。
　当時、学校へ向かったはずのローザは家に引き返してきた。家に戻った娘の姿を見た母親は、おぞましいものでも見るかのように恐る恐るローザに近付いてきたが、そのあとは体を低くして力強く娘の体を抱きしめた。「今朝、ママがここにつけてあげた髪飾りはどうしたの？」
　ローザの髪に触れながら母親はそう訊いてきた。誰にやられたの？　という言葉が第一声ではなかった。
「髪飾りを道に落としちゃったから、帰ってきたの」
　ローザは子供ながらに精いっぱいの嘘をついた。
「ローザ、髪の色で誰かに悲しいことを言われたの？」
「……」
　ローザは黙って首を横に振った。それも彼女にとって精一杯の嘘だった。
　母親のテレーザはローザが学校へ行く前、娘の長い髪が乱れないように丁寧にブラッシングをし、綺麗な髪飾りで髪を後ろで止めていた。なんて美しい髪なのでしょう、そう言ってローザの頬に優しくキスをし、学校に送り出していた。しかし綺麗に揃った艶やかな髪は誰かの手によって無惨にも切り落とされてしまっていた。柔らかな髪をなびかせて学校へ向かっていた今までの娘の姿は幻だったのだろうかと思うほど、その時のローザの姿は無惨なものだった。
「今迄もママの知らないところで辛い思いを沢山していたの？」
　テレーザは、自分達親子が世間から冷たい視線を注がれていることはわかっていた。 それでも娘のローザだけは守ってくださいと神様に祈り続けていたが、現実は残酷なかたちとなって現れた。

学校への道のり、大人達の冷たい視線から逃れると今度は同じ学校の生徒達の、悪意に満ちた視線が常に向けられる。陰口から始まり堂々と指をさされるようになり、心無い言葉を浴びせられ、石や物が投げつけられることもあった。そしてその日、ローザはついに数人の子供達に髪の毛を掴まれたのだ。ハサミで髪が切られていく音がいつまでも耳に残っていたが、それでも彼女は泣かなかった。そのあと家に引き返し、母親に抱きしめられると、安堵からかそれとも深い喪失感からか自分の感情などわからぬままに、ローザは激しい睡魔に襲われた。

夢は見ていなかったが、ぼんやりとした意識の中、
『神様、わたしの顔を見るとどうして人は、あなたのパパはナニジン？って訊いてくるの？』
ローザはそのことをずっと神様に問いかけていた。

その夜、ローザの食事は部屋に運ばれた。

母親の声で目覚めたローザは、母親の手を借りて上半身だけ起きあがらせた 。母親は用意した食事を机の上に置くとベッドに腰掛け、じっとローザのことを見つめていた。
「ねえママ、わたしの顔を見るとどうして人は、あなたのパパはナニジン？　って訊いてくるの？」

世間の人達から父親はナニジンかと尋ねられる度、ローザにはその意味がわからなかった。何度か母親に尋ねようとしたこともあるが、なぜか口に出して訊けなかった。だがその日は違った。ローザは食事を部屋に運んできてくれた母親に、初めて父親のことを尋ねたのである。
「パパは…」
そこまで言うと母親の言葉は途切れた。
続きを聞きたくてローザが母親の顔を見上げると、母親は悲哀に満ちた目をしていた。涙が出なくともこんなに悲しい目があるのかと、そう思えるほどの沈んだ目だった。
それは生きることへの限界を感じてしまっている目にも感じられた。

少しの沈黙のあと母親は何かを吹っ切るように大きく息を吸い込んだ。そして、
「あなたのパパは日本人よ、とても立派な方でした」
すぐに普段の温和な目に戻り、母親はそう力強く答えてくれたのである。
この時ローザは、今しがた見た母親の悲哀に満ちた目は、生きる限界を感じたのではなく、この地球のどこかで生きているであろう愛する男と、共に生きることの出来ない想いが顔に現れたのだと、そう思い直した。
パパは今どこにいるの？…どうしてお母さんと別れてしまったの？…パパは何をしていた人なの？
父親について訊きたいことは沢山あった。だが、ローザの口からついて出た言葉は、
「ママ、日本の国旗はね、神様がシンボルなのよ」
日本の国旗のことだった。
日本、と聞いた時、ローザの胸の中に浮かび上がったものは大人たちが敵対国と呼んだ日本のことではなく、白地に赤の日の丸…。学校で世界の国旗を学んだ時、教科書を開いた瞬間にローザの瞳に映ったものはその国旗だった。シンプルでありながらも、何か計り知れない大きなメッセージ性を宿しているような日本の国旗に、ローザは惹きつけられていたのである。
その日を境に、父親のことも自分の生い立ちのこともローザは母親に尋ねなくなった。それでも暗い夜空に向かうと、こう話し掛けていた。
「ねえ神様、パパは日本の人でママはアメリカの人。それだけのことなのにどうして人は怖い顔をして、パパはナニジン？と、わたしに訊いてくるの？　わたしが生まれたばかりの時も、わたしの顔を見ると大人の人達はよくその言葉を囁いていたわ…」

その時、ローザはまだ六歳だった。

＊　　＊

同じ国の人間同士が命を奪い合う中、異国の医師が傷を負った者達を救おうと必死であった。手を差し伸べたのは日本人の男だった。
同じ国の人間同士が命を奪い合う中、異国の女性が大人達の見捨てた孤児達を救おうと必死であった。手を差し伸べたのはアメリカ人の女性だった。

二人は自然の流れに従い、純粋に愛し合った。ただそれだけのことだった。しかし、二 つの国の血を引く小さな命が女の腹の中に宿った頃、二人の母国は、敵対国、とお互いを呼び合い殺戮の争いが始まっていた。その争いの傷跡は人々の心から情というものを消し去ってしまったのか世間は勿論のこと、子供を宿した女の家族も娘にとても冷たいものだった。堕胎が不可能な月に入った胎児の存在を知った時、女の家族達は「どうかどうか、娘の体から敵対する異国人の血を引く子供がこの世に生まれませんよう、お力をお貸しください」と、毎日のように神に祈り続けていた。娘に不慮の事故が起こることさえも願うほどだった。だが、家族達の祈りは神に聞き入れてはもらえなかった。数ヵ月後、ローザは大きな産声をあげて無事にこの地上に生まれ落ちたのである。しかし、敵対国の血を引く子供…、その子供を産んだ女というだけで家族も世間も冷たく、ローザとローザの母親に向ける周囲の攻撃は想像をはるかに越え、何の罪もない子供のローザが一番の犠牲者となった。

髪の毛を切られる事件が起きた日からローザは学校へも行けず、一人で家の外に出ることもなくなった。母親以外に話をする人もおらず、いつしか彼女は自分の心の中の神様と会話をするようになっていた。そして、少しずつ悲しみも薄れてきた時のことだった、朝早くから母親は家の中の物を処分しはじめていた。

「ママ、お部屋の中を、どうしてこんなに片付けてしまうの？」

家の中の家具を全部売却する手配をしている母親のことをローザは不思議に思った。

母親は手を止めると、ローザの顔を見て微笑んだ。

「ねえローザ、明日、ママと一緒に神様のいるお国へ行きましょう」

「神様のいるお国？」

「そう。そこに行ったら好きなことも何でもできるわよ」

「本当？　そうしたら私、そこのお国へ行ったら、日本の、パパのお国の言葉をお勉強してもいい？」

「ええ、いいわよ」

その母親の返事にローザは、わあ、と声をあげて喜んだ。一目散に母親の元に駆け寄って抱きついた。母親もローザの体をいつまでも抱きしめていた。

「あなたには、神様が、特別にパパのお国の言葉を教えて下さることでしょう」
　母親はローザの耳元でそう囁いた。
　ローザはまた満面の笑みを見せて母親に抱きついた。
　その夜、母親はずっとローザの傍を離れずに添い寝をしていた。しばらくのあいだ彼女は黙ってローザの髪を撫でていたが、ローザが眠りにつこうとした時に静かに話し出した。
「パパのこととか、今の内に、ママに訊いておきたいことはありますか？」
　どこか他人行儀のような丁寧な口調だった。
　ローザの意識はすでに朦朧としており、「今でなくてもいいわ」と答えた。睡魔に負けたローザは、神様のいる国へ行ったらパパの話を沢山聞かせてほしいと、母親にそう答えて眠りについた。
「そう。では…国(ごく)で…パパのお話を…沢山しましょうね」
　その母親の声をローザはボンヤリと聞いていた。

　翌日、ローザが目を覚ますとすでに朝になっていた。
　いつものように起こしに来なかった母親を不思議に思いながら、ローザはベッドから起き上がった。時計を見ようとしたが昨日の片付けの際に家の中の時計は取り外されており、時刻はわからなかった。ローザはベッドを出るとリビングに向かった。家の中は閑散とし、物音ひとつ聞こえてこなかった。少しの不安を覚えながらリビングのドアをそっと開けると、窓辺に母親の姿があった。
　母親は何か考えごとをしている様子で、木製の椅子に腰かけて窓の外をじっと眺めていた。ローザはその時の母親を見て、今日のママはなんてキラキラしているのだろう、と思った。窓から差し込んでいる光のせいか母親は光のベールの中に包まれているように奇麗で、母親だけでなく光が差し込んでいる辺り一帯が水面のようにキラキラとしていた。
「ママ」
　その声で母親はゆっくりとローザを振り返った。だが、母親は椅子に腰かけたままでおり、いつものように歩み寄ってローザの体を抱きしめることも、おいで、と言って自分のほうに娘を引き寄せることもなかった。その日の母親は少し様子が違っていた。

「ママ、どうしたの？」
「ママね、昨日の夜、不思議な夢を見て、目が覚めたの」
「夢？」
「ええ、そうよ」
　そう答えた母親の目は、どこか遠くを見ているようにも感じられた。

　昨夜、母親のテレーザは夢を見たあと眠ることが出来なくなって外に出ていた。夜空には大きな月が浮かんでいた。昨夜は満月だった。月がとても美しく、家の中に入ってからも一睡もせず、リビングの窓からずっとその月を眺めていたのである。
　ローザと母親のあいだに少しの沈黙が流れた。ローザは黙って母親の元へ近づいていく。　「ねえ、ローザ」
　母親が先に口を開いた。
　ローザは足を止めた。母親はいつもと様子が違っており、俯き加減にローザを呼んだ。
「綺麗なお空にいる神様と、綺麗な海にいる神様、あなただったらどちらの神様の元に行きたいと思う？」
　　母親はそうローザに尋ねたのである。
　あの時、綺麗なお空にいる神様のところに行きたい、とそう答えていたら、母親は自分を連れてどこへ行ったのだろうかと、ローザはふと考えることがある。

　あの時の、窓辺でキラキラと輝いていた母親はとても奇麗だった。だけどどこか近寄りがたい目をしていた。それでも空と海の神様の話をしたあとの母親はいつもの目に戻っていた。神様のいるお国へ行きましょう、と言った母親の言葉をローザは何ひとつ疑うことなく、そんな国が本当に存在しているのだと思うと嬉しくなった。
『飛行機で行くのとお船でいくのどちらがいい？』
　母親はそう自分に尋ねたのだと、ローザは思った。
　その時ローザは、母親の体を包み込んでいた光を見て、夕陽に染まった大海原を想像していた。 本物の大海原を見てみたいと思った。だから、
「海にいる神様かな、神様のいるお国へは飛行機よりもお船で行きたいもの」
　　海にいる神様の元に行くほうを選んだ。

「でもママと一緒ならどこでもいいわ」
　最後にその言葉を付け加えて。

＊　　＊

長い船旅だった。

ひと時も離れることなくローザは母親に寄り添っていた。神様のいるお国へは飛行機よりもお船で行きたい、と言ったローザの希望どおり母親は家具を処分したわずかなお金を握りしめ、ローザと船に乗り込んで神様の元へ旅立ったのである。

船内で、分身のように片時も離れることのないローザの髪を撫でながら母親は、「ローザ、あなたの容姿のことで誰かに傷付けられたとしても、けして、その人達を憎んではなりません。もしも心が苦しくなってしまった時は神様にこのように祈りなさい…」と、ひとつひとつゆっくりと祈りの言葉をローザに教えていた。そして母親は最後に、「もしも、私に罪があるというのでしたら、どうか私を産んだ母親を許してあげて下さい」

そう言い、ママのことも神様にお祈りして欲しいと言った。

その祈りの言葉の中には、『私のこの髪の色に罪は無いのでしたら、どうか罪であるという人達の行動を正してあげて下さい』というものもあった。ローザは長さの整っていない自分の髪の毛を数本手に取ると、「わたしの髪の毛を一本抜いてみて」と、母親に言った。

「急にどうしたの？」

「いいから抜いてみて」

「……」

母親のテレーザは不思議に思いながらも娘に言われるまま、髪の毛を一本だけ取って静かに引き抜いた。髪の毛を抜いてどうするのか訊こうとしたが、ローザのほうが先に口を開いた。

「ね、簡単に抜けたでしょ？　ママが優しく引っ張っても簡単に抜けるのに、学校で知らない人達に凄い力で髪を引っ張られたことがあったのよ。こうやってとても凄い力で。でもねわたしの髪は抜けなかったの。わたしから離れないように頑張っていてくれたのよ」

こうやって、と言った時、ローザは小さな手で自分の髪をわし掴みにしてその時の状況を母親に教えた。娘が苛められている様子を目の当たりにしたようでテレーザは胸を痛めたが、娘にかける言葉は何も見つからなかった。

「だからねママ、心配しないで。わたしの髪も瞳の色もみんなと違うけれど、ママとも違うけれど、わたしはこの髪が大好きなの。わたしが他の人と違うものを持っているからって、そんなことで殺されたりはしないわよね？　ね？」
　ローザは自分が他人と少し容姿が違っていても、命さえあれば強く生きていけるのだと、そう思うようになっていた。そのとおりよ、と母親も答えてくれると思ったが、予想に反し母親の目から大粒の涙が溢れ出した。
　この時、手に持っていた娘の髪の毛が風にそよぎ、テレーザの手から離れ落ちた。彼女はその髪の毛を必死に探そうとした。だが涙で視界はぼやけ、テレーザは視力を失った人のようになって一心不乱に手探りで探しはじめた。
　ソンナコトデ、コロサレタリハ、シナイワヨネ…。
　ふいを突かれた言葉だった。その言葉を聞いた瞬間、テレーザの思考は止まり、そのあと止めどなく涙が溢れ出したのである。
「ママ、どうしたの？　どうして泣いているの？」
　ローザは急に泣き出した母親に驚いている。ローザが母親の涙を見たのはその時が初めてだった。
「ママ、あの時の約束を覚えている？」
　ローザの手が母親の頬に触れた。
　自分の頬に触れている娘の手の感触で、テレーザは我に返った。
「ヤク・ソ・ク？」
　テレーザは声をうわずらせながらローザを見た。
　母親の涙を拭うため、ローザの小さな手は何度も何度も母親の頬を摩っている。
「ずっと昔、ママもこれからは泣かないからあなたも泣かずに強く生きていって欲しいって、わたしにそう言ったでしょ？」
「？」
　テレーザは娘の言っていることの理解ができずにいる。
　それでもローザは話を続けた。
「ずっと昔、ママもこれからは泣かないからあなたも泣かずに強く生きていって欲しいって、わたしにそう言ったでしょ？」

「ローザ、いつママはあなたと、そんな約束を？」
　テレーザに覚えはなかった。この世に生まれた時からローザに背負わせた苦しみは計り知れないものであり、泣かないことを約束しましょうなどと言えるはずもなかったのだ。
「いつって、一回や二回ではないわ。わたしがママの声を聞き取れるようになってから毎日のようにそう言っていたでしょ？」
　ローザははっきりと答える。
（毎日？）
　テレーザは驚くばかりだったが、それでもローザは言い続けた。
「沢山沢山、私にそう言っていたでしょ、泣かないって約束したでしょ、ママ、忘れちゃった？」
　ローザがそこまで話すとテレーザは、もしや、と思った。ローザがまだお腹の中にいた時、子供を一人で生もうと決心した日からもう泣かないと心に誓い、そう、
『ママもこれからは泣かないから、あなたも泣かずに強く生きていって欲しい』
　ローザの言った言葉を一語一句そのままに、お腹の中にいる子供に何度も語り掛けていたのである。
　そしてこの時、テレーザはもうひとつ気付いたことがあった。ローザの涙を見たのは、彼女がこの地上に生まれ落ちたあの瞬間だけかも知れない、と。

＊　　＊

「ローザ、此処はね、マウイ島という島なのよ」
　繋いだ手はとても暖かかった。
　ローザは母親の穏やかな声に安堵した。長い船旅を終えて母親の手に引かれて辿り着いた場所はマウイ島だった。目の前に広がる青い海原はローザが想像していたとおりキラキラと輝いていた。このキラキラは神様なのだとローザは子供ながらにそう思った。
　マウイ島…その名は初めて聞いた島の名前であった。

白い砂浜がどこまでもどこまでも続き、ビーチを行きかう人達の顔立ちは西洋も東洋も入り混じって誰もが楽しそうに笑っていた。今迄の、ローザに冷たい視線を送っていた人達のような顔をした人はどこにも見当たらなかった。マウイ島に来る前の生活はとても苦しく、母親の内職だけが収入源であり、食べていくのがやっとという生活だった。当時、観光地というものを知らなかったローザは、ここは本当に神様の楽園なのかも知れないと本気でそう思った。これからはずっとこの島で、母親とふたり暮らしていけるのだと何も疑うことはなかった。

マウイ島に着くと母親のテレーザはローザの手を引いてすぐに仕事を見つけようとした。面接に行った先はリゾートホテルである。しかし最初に訪ねたホテルも二番目のホテルもあっさりと断られた。それも致し方ないことだった。母親は履歴書なるものは何も用意しておらず、口頭で、スタッフを募集しているかどうか確認した上での仕事探しだった。二番目のホテルでは、ローザの前で、母子家庭の上にお子さんがまだそんなに小さいのでは雇うことはできないと、はっきり断られた。次もその次も、似たような理由で母親は断られ続けた。自分が要因となっていることのショックと、長い船旅によってローザの疲労は極限に達しようとしていたが、五番目に訪れたリゾートホテルに足を踏み入れた時、心地よい風がローザの頬を撫った。そのあとのことはあまり覚えていない。

ローザは母親の面接の最中にソファーにもたれかかり眠りについてしまった。それは不思議な眠りだった。「疲れたでしょう少し眠りなさい」と男性的な優しい声に囁かれ、安堵して眠りについたのだ。その声は母親を面接したホテル責任者の、男の声だったのかも知れないが、わからぬままである。そしてローザの眠っているあいだに母親は、その五番目に訪れたホテルで採用されたのである。母子寮も提供してくれるというありがたい採用だった。そしてまた、
「今日はこのままうちのホテルに宿泊して、お客様の立場になってスタッフ達のサービスを見て、学んでください」
母親を面接したホテルの責任者はそう言って、その日は母親とローザを無料でホテルに宿泊させてくれたのである。

　あの時の恩は一生忘れないと、母親のテレーザは仕事に就いたマウイ島のホテルの責任者に対して口癖のようにそう言っていた。彼女は娘のローザを育てるためにホテルのクリーンスタッフとして人の何倍も働いてきた。そして何よりマウイ島に来てからの母親は、ローザの父親である「佐伯創一郎」のことを話してくれるようになったのである。
　それは絵本を読む時のようにとても安らいだ声で。

「ねえローザ、パパのお国の言葉でね、手当て、という言葉があるの、あなたが日本語を学ぶ時がきたらどんな意味があるのか調べてみるといいわ。あなたのパパはね、人の間には敵も見方も存在しないと言って、色んな国の傷ついた人達を救っていたのよ。その時に、手当て、という言葉を沢山使っていたわ。ママがね、手当てとはどういう意味ですか？　とそう尋ねた時、その言葉はとても奥が深いからきちんと勉強して、それから説明をしますと、パパはそう言って微笑んでいた。だけど…」
　六歳の娘にそのあとの父親の話は聞かせたくなかったのか、話はそこで途切れた。それ以上続くことはなかった。だが途切れたままのその話は、後々までローザの胸の中に色々な空想を想い巡らせた。
　だけど…その後、父は「手当て」について説明をしてくれることはなかった。
　だけど…その後、父は母親に微笑まなくなった。
　だけど…その後、父は黙って母親の前を去ってしまった。
　幾通りものストーリーがローザの胸の中に湧き上がった。これが現実のことではなくドラマや映画の世界だったら最後はハッピーエンドで幕を閉じるのだろうと、十代の頃のローザはそのようなことを考えるようになった。
　そして、いつの日かローザはこんなストーリーを作り上げていた。

『異国の恋人が自分の子供を身ごもりました。しかし、その男の家族は異国の女性のことを認めませんでした。それでも彼は彼女を見捨てることは出来ず、家族の反対を押し切り、やがて彼女の元へやって来ました。彼女の傍には小さな女の子がいました。彼は自分の子供を紹介されると、目に涙をいっぱいためて、「大きくなったね」と言って、その子をいつまでも抱きしめていました…』

　最後の最後は母親が幸せになるストーリーを、学校でも家の中でも海辺でも眠りに着く前もローザは空想するようになっていた。何百回いや何千回と彼女はこの空想に浸ってきた。自分が作り上げた物語の中で幸せに満ちた母親の顔を想像した時、とても心が満たされた。
　だが、現実は物語のような方向に動くことはなかった。ローザの二十二歳の誕生日を目前に母親は他界してしまったのである。ローザが病院に駆けつけた時、母親は奇跡的に意識を取り戻し、ローザにこのように言った。
「ローザ、あなたが小さかった頃、何もなくなった部屋の中で、あなたを抱いて眠りについた時、何処からともなく…こんな声が聞こえたの、『あなたの娘をワタシの元に連れて来なさい、マウイ島に連れて来なさい』と。でもねローザ、私がマウイという言葉を耳にしたのはその時が初めてではないの。あなたがお腹の中にいた時、そこは神の宿る島であると誰かが教えてくれたのよ。その誰かがどうしても思い出せなくて…。
ローザ、もしも…あなたがこのまま一人になってしまった時には、前にも言ったように…」

　そこで母親の言葉は永遠に止まった。

　最後まで話し切れなかったが、その時の母親の表情は安らかだった。四十六歳という若さでローザの母親は静かに生涯の幕を閉じたのである。死因は急性心筋梗塞だった。朝、普段と変わらぬ笑顔を見せていた母親が、その日の夜にはもうこの世の人ではなくなっている…。母親とふたりきりで生きてきたローザがその現実を受け入れることなど到底できるはずもなく、ただ呆然と彼女は母親の手を握り締めていた。母親の手が冷たくなっていくのを感じた時、ローザは意識を失った。

　目を覚ました時ローザの体は静寂な病室のベッドの上に横たわっていた。彼女は焦点の合わない目を閉じることなく、窓から入り込む椰子の葉ずれの音をいつまでもいつまでも聞いていた。
『あなたが二十二歳なったら長い休暇を取って、日本にでも行きましょうか』
　母親のテレーザは息を引き取るほんの数日前、そんなことをローザに言っていた。
　母親は雇ってくれたマウイ島のホテルで必死に働いてきた。ホテルの小さな寮に住み込んでローザを大切に育て、ローザが一人になっても生きてゆけるようにと、多くの観光客が利用するオイルマッサージの技術と日本語だけは学ばせていた。
　どんなに生活が苦しくても、そのふたつは学ばせてくれたのである。

母親が亡くなったその日からローザは眠ることが出来なくなった。太陽もまだ眠りについている時間、ローザは真っ暗な海辺をひとりで歩き、気が付くとベンチの上に座っている。何処をどう歩いてそのベンチに辿り着いたのかも記憶になく、何も見えない世界は生きているという感覚さえも麻痺させた。
（神よ、わたくしに涙をお与え下さい。この悲しみを涙で流して下さい。わたくしは母親が幸せになるストーリーを沢山沢山想い描いてまいりました。そうなるように何度も祈ってまいりました。それなのに母の生涯は…なぜにあのような…惨（むご）い終わり方をしてしまったのでしょうか…）
ローザは見えぬ神に問いかけた。指を力強く組み合わせても、体のは震えは止まらなかった。
だが、その時だった、『眠りなさい』という声と供に突然暖かな風が吹き付けた。そして、何処からともなく太く穏やかな声が響いてきた。

『あなたがいつかワタシの存在に気付いた時、地上で体感したその経験を生かし、地上で苦しむ魂達をシンの方向へ導くことができのである。あなたが地上で果たすワタシとのヤクソクは、人々をシンの方向へ導くことであり、あなたが何度も心の中に描いてきたものは、ワタシが、あなたの魂に深く植えつけたものである。母親の死はけして、むごい、という言葉をつかうような死ではない。そして涙も、けして、悲しみというだけの感情から流れ落ちるものでもない。いつかあなたはそのことに気付くであろう…』

気が付けば催眠にでもかけられたようにローザは暖かな風の中で眠っていた。
瞼を開けると、無数のダイヤが散りばめられているような荘厳の輝きを放った海辺が、ローザの目の前に広がっていた。
そして、その日から十八日後、ローザは二十二歳の誕生日をひとり迎えたのである。

＊　　＊

「お母さん、あれからどれほどの歳月が流れたのでしょう。あなたが父に宛てたこの手紙も色褪せてしまいました。何度も言いますが、時代は変わりました。わたくしももう六十三歳です。あなたよりだいぶ年上になってしまいましたね」

第３章に続く